

○ナガバヤブマオの一品 (檜山庫三) Kozo HIYAMA: A new form of *Boehmeria Sieboldiana* Bl.

東京都八王子市の高尾山の林下にナガバヤブマオで雌花序が総状に分枝して複生するものがある。花序の側枝は疎に開花して長いものは 10 cm に達する。花や果実ハナガバヤブマオの普通の品と変らないが、葉はかなり大形のものがある、長さ 25 cm、巾 15 cm に及ぶものがある。よく出来たものでは茎が分枝してくるが、茎の側枝上に出る花は単一の穂状花序をなしている。複生花序の様子は南アジア産のナガバヒメマオ (*Boehmeria Zollingeriana* Wedd.) の如くであって、このような花序を持つ邦産ヤブマオ亜属 (*Duretia*) の植物はこれまで知られていなかったように思う。産地に因んで**タカオヤブマオ**と新称する。(東京都立大学理学部牧野標本館)

Boehmeria Sieboldiana Bl. forma **decomposita** Hiyama, nov. f.

Inflorescentia femina decomposita, ramis filiformibus ad 10 cm longis divaricatis. Cetera ut in typo. Hab. Mt. Takao, Prov. Musashi, in shady place (Hiyama & Kobayashi—Sept. 30, 1962—holotype in Makino Herbarium).

○月山のオゼコオホネその他の注目すべき高山植物 (佐藤正己) Masami SATO: *Nuphar pumilum* var. *ozeense* and some remarkable alpine plants found on Mt. Gassan

去る 1948 年に、国立公園候補地の学術調査のため山形県の月山に登った時、同行の武田久吉博士から、かつて 25 年前に月山に登った時に弥陀ヶ原の頂上から下れば登山道の左側にある一つの池塘に、ネムロコオホネに似た変りものがあったことを覚えているから、再検討したいとお話があった。そこで 2 人で注意して見て歩いたら、簡単にその池塘が見つかり、コオホネもあったが花が開いていなかったので種類を確認できなかった。筆者が後にまとめた報告書の“朝日～月山～鳥海”には、*Nuphar* sp. (オゼコオホネに近いもの) としておいた。その後何回か登山し、完全な花を得てそれがオゼコオホネであることは、原寛、佐竹義輔両博士にも確認していただいたが、付近の多数の池塘群を捜しても、他の池塘には全く見られず、ただ一つのやや深い池塘のしかも深い所に僅かに数株あるだけなので、果して天然生のものであるかどうか、その由来に多少の疑問がもたれるし、またうっかり公表すると絶滅の危険も予想されるので、一般には報告しないでおいた。ところが昨年 7 月 14 日、地元鶴岡市在任の石井貞吉、田村茂広の両氏が植物同好会の人々と月山に登山した際に、8 合目弥陀ヶ原小屋主人の滝沢氏の話によって、小屋の東方約 500 m にある池塘を調査したところ、1500—2000 株と推定されるオゼコオホネの大群落を発見し、詳細に付近の植生を調査し、多数のカラー写真や花をとって下山した。たまたま今夏帰省の折に、両氏からこれらの資料を見せていただき、また詳しく話を聞いたので、筆者の不完全な前の報告を訂正する意味でここに記録しておく。なおついでながら、9 合目仏生池小屋の近くに、コマクサとイワブクロとチョウカイフスマがかなりよく生育している地域があるが、これは戦前に小屋の主人の先代矢島氏が蔵王山からコマクサを、鳥海山からイワブクロとチョウカイフスマを持ちこんだもので、天然分布ではないから注意していただきたい。(茨城大学文理学部生物)